

[概要]

今日の日本では、大規模小売店の主流化による地元商店の廃業や、少子高齢化による単身世帯の増加、交通網の弱体化などを背景として、日常の買い物が困難な「買い物弱者」が多く存在する。本研究では、富山県入善町で買い物支援事業の一環として運行している移動販売車「あいさい号」に焦点を当て、利用する高齢者の食料品購買行動の実態を把握するとともに、地域福祉の視点からみた、移動販売が高齢者に果たす役割について明らかにすることを目的としてインタビュー調査を実施した。その結果、移動販売車「あいさい号」は、買い物支援事業として買い物の機会を提供するだけでなく、高齢者の社会的孤立を防止するなど地域福祉においても重要な役割を果たしていることがわかった。また、販売員や利用者同士の関わりが生まれることで、「移動販売での買い物や会話が日常の楽しみ」という意識につながり、高齢者の買い物の困難さを取り除く一助となっていることが明らかになった。移動販売車「あいさい号」は、個別に自宅を訪問する形態ではないため、見守りという面での福祉的役割は薄いですが、地域住民との関わりによって、利用者同士が互いに見守りの意識をもつことにつながっていることが読み取れた。

キーワード：高齢者，移動販売，コミュニティ，地域福祉